

市民のページ

お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに関連することなどを紹介していきます。

その8 新島 襄の生い立ち

八重の二番目の夫となる新島襄は、1843年に上州群馬県安中藩士・新島民治の五番目の子として、江戸神田の安中藩邸で生まれました。新島家の子は、それまで四人とも女だったので、祖父は襄が生まれる際もまた女かと嘆いていたところ、男の子と聞き「しめた」と手をたたいたそうです。また、襄の生まれた1月14日は正月の七五三綱がまだ飾られていたこともあり、襄の幼名は「七五三太」と書いて「しめた」とつけられたそうです。

襄は11歳で安中藩の学問所に入り、添川廉斎から漢字を習います。この廉斎とは、今の喜多方市小荒井の農家の出身で、若いころは会津藩軍事奉行・広川庄助の従僕でした。廉斎は庄助に従い江戸に出て18歳のとき儒学者の古賀精里に学び、その後も京都で漢学者の頼山陽、備後福山で漢詩人・菅茶山の元で学んでいます。その後、大阪で安中藩主・板倉勝明に召し抱えられます。この廉斎の教えで安中藩の藩風も一変したといわれています。

襄は14歳のとき、藩主の命で蘭学を学び、

19歳のとき、幕府の軍艦操練所で算術や航海学を学びます。外国の文化に触れ、外国への憧れを強くした襄は、22歳のときに函館に渡り、国禁を犯して上海行きの船に乗り込み密航します。出 国に成功した襄は、上海でアメリカ行き



新島 襄 (同志社大学提供)

密航してアメリカに渡った襄は、初代駐米公使・森有礼によって正式な留学生として認められます。その後、襄はアメリカを訪問していた岩倉使節団から英語力を買われ、使節団の一員としてヨーロッパ訪問に同行しています

という正式名をもらいます。その後、船主の援助を受け、24歳でキリスト教の洗礼を受けます。さらに、ボストンの名門アーモスト大学で学び、神学校を卒業した後1874年11月26日、約11年ぶりに日本に帰国します。**翌**年、襄は父への手紙で自分の名前を「襄」と記し、ジョセフの略だと説明しています。その後、襄は京都へ向かい、宣教師ゴードンの家で初めて八重と出会うことになりました。▼監修：会津歴史考房 主宰・野口 信一さん